Y30b　芸術作家は宇宙・天文分野に何を期待したか：天文台での作品制作・展示

玉澤春史、樋本隆太、河村聡人、磯部洋明

京都大学宇宙総合学研究ユニットでは 2014 年より「社会連携部門」が設立され、それまでも行っていた宇宙天文に関する一般向けのイベントをより積極的に仕掛け、学生の主体的な活動として支援する体制を整え、さらに一部についてはその分析の各種報告・論文化まで念頭におき、社会連携活動の業績化を考えている。

2013 年には京都大学理学研究科の花山天文台を会場に芸術作品を制作、展示する企画を一般公開と関連させて行ったが、（日本天文学会 2014 年春季年会、玉澤、Y23a）2014 年についても大学院生・天文台若手職員が主導して行った。説明会や作家との折衝段階で様々な着目点があり、特に芸術大学に赴いて行った説明会では、一部説明会を大学のカラーに合わせてアレンジするなど、個別要求に合わせた対応をとった。作品制作においても大学院生が関わり、、特にサイエンスデータを取り込んだ作品については、担当となる大学院生が作家の要求を把握したうえで、専門性の高い資料を入手、作品に反映するなど、双方の理解と要求を直に確認しギャップを埋める作業が確認された。単純な知識伝達よりも踏み込んだ作業を意味し、双方の分野を理解することになり、科学コミュニケーションでしばしば行われている一方向の知識伝達・提供から双方向の知識理解へとつながりうる。また、天文台の利用に重点をおいた作品も存在し、作家の目を通して宇宙天文ファン以外がどのような点で天文台という施設に着目するかを議論を通して天文台関係者にあらわにしていった。いずれの場合も相手の専門により求められ提供する情報をアレンジする必要があることを示している。。本発表ではこのような作家といった「対象を明確化させたうえでの科学コミュニケーション」について具体的に対応した内容から考察する。